

## 映画・映像における音響技術の教育と実践的基礎知識の研究

**研究年度・期間**：平成 11 年度

**研究代表者**：豊原 正智

（芸術計画学科 教授）

**研究ディレクター**：吉岡 敏夫

（映像学科 助教授）

**研究助言者**：荒川 輝彦

（映像学科 非常勤講師）

### 研究経過の概要

映画、映像制作における撮影技術が重要であるのは言うまでもないが、今日ではサイレント映画、映像は考えることはできない。映画の音響は台詞、効果音、音楽の三者から成り、同時録音、アフレコ、効果音、ミックス作業等の複雑なプロセスを経て、サウンド・トラックが出来上がる。そのようなプロセスを明確にするため、研究メンバーは8月にそれまでに検討してきた音響技術の概要をまとめ、分類化し、組織化し、討議した。そして、それを冊子にするために執筆を続け、8月末に完了した。印刷原稿が出来上がり、冊子「映画制作のための音響技術」は3月未完成。

### 研究成果について

映像、映画制作における音響技術に関する書物はないわけではないが、工学技術に則するあまり専門的になりがちであったりして、教育において適切かつ基礎的なものは少ない。もっぱら大学教育において必要不可欠な基礎的知識を重要な骨子として、12章からなる冊子「映画制作のための音響技術」にまとめた。その内容は、第1章 映画における音響、第2章 映画制作システム、第3章 音の成り立ち、第4章 録音機、第5章 マイク、ケーブル、ブーム、第6章 テープ、第7章 録音、台詞、効果音、音楽、第8章 編集、第9章 シグナルプロセッシング（信号処理）、第10章 ダビング、第11章 光学録音、第12章 ステレオ音響から成る。

### 研究の反省

この研究で完成した冊子はいくまでも基礎的知識を重点に置いた。その点がこの研究の目的であるのだが、この冊子を読み、よく理解した者は当然新たな知識や理解のために次の段階への意欲が起こるであろう。そのとき、現状にあるさまざまな情報は必ずしも、そのステップアップに答えてくれるかどうかは疑問である。そのためのより適切な研究が必要であるかもしれないと思う。